

東京蜘蛛談話会通信 No. 72. (1991年5月10日)

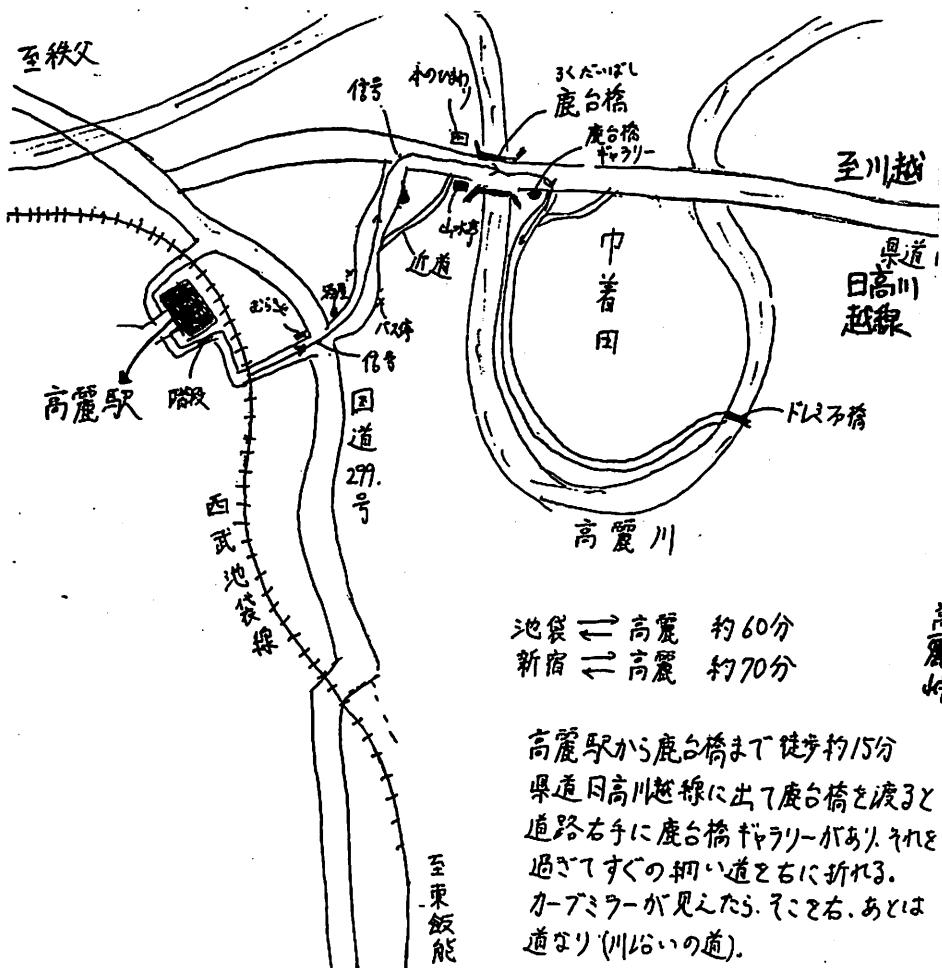
(No. 71の発行年1990年は1991年の誤りです)

☆5月・6月・7月・8月・9月の活動☆

採集観察会のお知らせ 埼玉県入間郡日高町 「巾着田」

採集観察会 第1回 5月19日(日) 10時 雨天決行 第3回 10月13日or20
第2回 7月14日(日) 10時 雨天決行 第4回 2月16日

集合地点: 西部池袋線「高麗(コマ)」駅 改札口 巾着田までは徒歩10分
世話人は平松毅久 (TEL. 0492-33-8792)。「駅前に不二家、近くに東急ストア
がありますが、いわゆる弁当屋はないので、弁当持参が無難です」



夏の合宿計画 ~~裏原宿本郷~~ 行かれたことのない方、お薦めです! 【詳細別記】

日時 7月27日(土)~29日(月)

宿泊 福島県耶麻郡北塩原村裏磐梯曾原 あやめ荘 TEL. 024-132-2805

合同例会の予定 駒場住区センター

日時 12月1日(日) 10時開会 【詳細は9月の通信にてお知らせします】

ちゅう るい だい す

音量

音量

はか せ

は虫類大好きわたし博士

どうきょう じんせい あやその

東京の6年生・宮園あがさん

宮園さんは、ハチ類のことを
なじみが好きなの。かといふ
質問で、「頭の表情もしぐさが
かわいい」といふ点。

宮園さんは、ハチ類のことを
なじみが好きなの。かといふ
お口を開けて驚威しま
す。ヒョウモントカゲモドキ
かわいい」といふ点。

トカゲ、カメ……10種類以上も飼育 けん あゆう つき つま

ユニークな研究次々と

トカゲやカメなど、ハチ類のペシトがはやってこますが、東京都三鷹市の宮園あがさん(私立蘭嶺学園小6年)は、四年のときから家で十種類以上のハチ類を飼育、研究していま。六年生でやったのは、ヒョウモントカゲモドキのウシナ(ヒト)、スタイルで形や色、かたさがどう変わるか、ユニークな研究でした。「わからぬじ、よく観察してどい。かわいいだよ」という「ハチ類博士」です。



つたまつかけば 国立科学博物館(東京)が、東京都八王子市高原で行った虫の観察会です。三年生だった宮園さんは、「の間に二ホンカナヘビをつかひかあわせした」「すりへかわい」と思つたそつだよ。



4、5年生の時はクモとカナヘビを研究

前回ヒョウモントカゲモドキの巣をかえたひすぐとストレスがたまつてしまつたそつです。がき続けたり、便秘になつたり、水のむつなウンチを出すよくなりました。ウンチの筋道など、この時のことが понつてこなつました。

宮園あがさんは宮園真理子さんの娘さんです

(1) 開会(谷川明男) 進行: 谷川明男 スライド: 笹岡文雄

(2) 午前の講演

①新海明「キンヨウグモの網について」: 従来、本種の幼体は水平円網を張り、成体は網を張らなくなると言わっていた。しかし、成長に伴なう継続調査をした結果、成体でも数本の糸上で餌捕獲をしており、この「網」は、幼体の水平円網が糸数を減少させて生じたものと見なす事ができる。

②萱嶋泉「ミズグモの冬期の巣の構築過程について」: 夏期には水面近くに作ったミズグモの住居は、冬期には水底の水草の中に作られ、その中で越冬する。冬期の住居の報告は初めてである。

(3) 記念撮影・昼食

(4) 総会 13:25~ (議長 松本誠治) 会員数は昨年より16名増え、145名。

活動報告: 会誌Kishidai 60(8月), 61(1月), 通信69~71号を予定通り発行。神奈川県の神武寺にて4回の採集観察会、長野県白馬村神城にて合宿。総会例会4月、合同例会11月に実施した。決算報告: 別紙の通り承認。役員改選: 運営委員現行10名に高橋祐子を加えて、11名とする(任期は1991年度まで)。本部・事務・編集(会誌・通信)・会計監査は現行通り。

今年度の活動計画: 1991年度予算案(別紙参照)を承認。なお、会場係の通信費などは当日の会場費などから支出する。採集観察会・合宿・合同例会は案内参照。会誌62号(7~8月), 63号(2~3月), 通信72~74号(5月, 9月, 2月)

(5) 午後の講演 ③谷川明男「キジロゴミグモとヤマゴミグモ、シマゴミグモとヤマトゴミグモについて」: 演題の各2種は区別が難しく、別種かどうか疑問が持たれていた。前2者は外雌器・貯精のう・腹部の側面形態、♂のバルブの中部把持器の先端および基部付属物などの違いにより区別できる。後2者は腹部の突起の状態、♂バルブの中部把持器・卵のうの形などから区別できる。

④宮下直「造網性クモ類における生活史の定量的研究の必要性」: 日本におけるクモ類の生活史の定量的研究は遅れている。特に成長パターン、産卵数・卵サイズ・生残率・餌摂食量といった生活史研究における不可欠のパラメーターについてはほとんど分かっていない。今後、若手を中心に研究が進むよう期待したい。ジョロウグモの摂食量の季節変化やゴミグモ属3種(ヨツデゴミグモ・ゴミグモ・ギンメッキゴミグモ)の生活史特性を具体例として説明があった。

⑤新海栄一「日韓合同クモ類調査隊報告」: 昨年8月~9月に新海栄一・小野展嗣・池田博明の3氏が招待されて訪韓した。採集や観察の様子をスライドで紹介。成果としてはイソタナグモ、アシヨレグモ一種、タイリクヒラタグモなどがあった。詳しくは後日報告予定。

⑥小野展嗣「台湾の生物」: 本年3月に台湾の高山帯を中心に調査した。高山帯はまだ冬期という状態だったので、約1週間、東海岸へ行き、イソタナグモを初記録した。他にダホウグモ・ミツカドオニグモ・ジャノメグモなどを採集。

(6) 懇親会 17:30~ 自己紹介の後、歓談

出席者: 梅林力、小沢実樹、小野展嗣、加藤むつみ、萱嶋泉、国見裕久、熊田憲一、笹岡文雄、新海明、新海栄一、鈴木成生、高橋祐子、谷川明男、中島晴子、林秀幸、平松毅久、古浜隆、松浦祐司、松本誠治、宮下直(以上20名)

おたよりから 例会・総会の出欠ハガキの近況から転載させていただきました。

●石野田辰夫(宮崎県): 自然科学部の生徒達6名とジグモの生活を調べています。「イヤダ~」というのを「カワイイよ、よく見てごらん」「キレイだよ、この天然色」何とかかんとか言いながら、21世紀のお母さんにアピールしているところです。

近頃やっと新しい学校に慣れてきました。早く以前のペースにもどそうと考えているのですが、家の中は足の踏み場もないようになっています。総会の盛会で嵇多い事を祈っております。

●大熊千代子(福岡): 通信No.71をはじめクモ学の近況を沢山お知らせいただきまして有難うござ

いました。私は目下久し振りにクモのスケッチに励んでいます。東南アジアの水田産クモ類の手引書の手始めに昨夏出張したバングラデシュの水田産クモ類のパンフレットを出す予定で、その下準備です。アシナガグモも今年一杯で卒業して、また沢山のクモとお付き合いしたいと、スケッチをしながら考えています。順序が逆になりましたが、談話会の皆様の御健闘をお喜び申し上げます。

●小沢実樹（東京）：なんとかしなければと思いながら、どうも腰をすえてクモとつき合う時間が少なく困ります。通信、毎々ありがとうございます。

●小野辰嗣（東京）：現在、国立科学博物館に寄贈された大井良次先生や小松敏広先生のタイプ標本の整理・登録を行っています。博物館の登録標本は一種の国有財産として永久に保存されます。

●笠原喜久雄（埼玉）：以前から蜘蛛については興味を持っておりましたが、採集方法、標本の作り方、また同定がむずかしいこともあって教えていただける方があればと思っておりました。談話会へも入会させていただけるとは思っておりませんでしたが、池田様、熊田様よりご親切なるお手紙や資料をいただき感激しております。ほんとうに有難うございました。日高町での観察会には是非出席させていただきたいと思っております。

●加藤むつみ（千葉）：本当はカブトガニの脱皮の仕方とクモのとを比較して見ていただいて、その違いについて御意見など伺いたくVTRを撮っていたのですが、失敗てしまいました。

●加村隆英（大阪）：いつも欠席で申し訳ありません。元気でやっております。皆様によろしくお伝え下さい。

●萱鶴泉（東京）：2月2日に新年会を開きました。16名集まりました。御仕事の関係で欠席された方もありました。世の中がさわがしくなると集まりにくくなります。会員の多くは、現在第一線で活躍中の方々ですから、いたしかたないですね。

●国見裕久（東京）：大学は今が一番忙しい時で、入試や学生の相手で休む暇もありません。さて、談話会の準備ご苦労様です。今年こそ出席しようと思っておりますのでよろしくお願ひ致します。

●近藤昭夫（神奈川）：昨日の総会はいかがでしたか。自慢できる話ではありませんが秋の合同例会には時々出でましたが、東京蜘蛛談話会の総会には多分出たことはないと思います。ここ数年4月～5月に週4日の実習があり、日曜はその穴うめの雑事に追われています。ちなみに昨28日と本日は研究室に出て、ジョロウグモ低温処理胚のチェックとクモ学会の書類整理、学内委員会の会議資料の準備に追われていました。実はこの葉書もそれらの書類に埋もれており昨日発見した次第です。今年度は大学院の鈴木・板倉両会員のほか卒論の学生を3名かかえてしまい、潜水艦内のようにせせこましいところで生活をしています。大変遅くなって申し訳ありませんが、ついでの時にでも皆様によろしくお伝え下さい。

●斎藤慎一郎（神奈川）：一身上の都合により、このたび退会させていただきました。これまでの皆様の暖かい御指導に心より厚く御礼申し上げます。また皆様の御活躍をお祈り致しております。

●西條雄介（大阪）：2月23/24日と兵庫県の調査で、吉田先生や西川先生に連れられて、城崎のとなりの竹野町に行き、カニスキをたらふくごちそうになりました。今日（2/28）から北海道に一人旅です。3月30日には長良川河口堰反対デモに参加するため、多分東京に行くと思います。その他はバイトの日々です。元気にやっています。

●佐藤尚子（神奈川）：春になってお花屋さんも忙しくなってきて、お休みがいただけなくて欠席致します。

●新海明（東京）：最近になり、冬虫夏草の研究者、概日リズムの研究者、フェロモンの研究者など情報交換をする機会がありました。それぞれ大いに興味をひかれます。多様な分野の研究者とのつきあいをひろげたいものです。

●須賀瑛文（岐阜）：名古屋市から少し田舎的なところへ転居しました。名古屋の自宅では見られなかったクモがこの付近にはいます。4/1より勤務がなくなり（退職）、自由の身になれた喜びでいっぱいです。これからは少しずつ自然に親しむ機会が増えそうです。植物もクモもと欲張っています。今後とも皆様方のご指導をお願い致します。

●菅波洋平（茨城）：6月初旬に『高萩の動物』が出版されます。できるだけ多くの動物群の専門家

に調査を依頼し、市民向けの本とは言え、かなり専門的なものになりました。その中に地上性のものと土壤性のクモを載せました。総会の盛会をお祈り申し上げます。

●鶴崎展巨（鳥取）：ご無沙汰しています。今夏のクモ学会大会ですが、8/30（金）、8/31（土）の2日間となりました。結婚シーズンその他で日曜日の会場の確保ができなかったもので（9/1は大安）、お務めのある方には大変申し訳ないのですが、よろしくお願ひ致します。交通不便なところですが、おさそいあわせのうえお越し下さい。

●東條清（和歌山）：昨年（1990/7/25）、和歌山クモの会を結成しました。会員は現在9名ですが、今後増える見込みです。会報第1号も今月終わり頃出る予定です。事務局は私のところです。和歌山へおこしの節は是非ご一報下さい。〒642 海南市日方1156 東條清 TEL. 0734-82-4028

●利岡匠（東京）：大学を卒業しまして、百貨店の（株）高島屋東京店に入社しました。商品試験室という部署で主に品質管理を行っております。

●中島祥吉（東京）：種々の雑用が多く、なかなか参加できません。全くの素人ですので、いろいろ教えていただきたいと思います。

●中平清（高知）：アオグロハシリグモに関しての一文を草し始めたところ、湾岸戦争について腹が立ち、原稿どころではなくなっています。年をとれば気が永くなるように思っていましたが、どうも気が短くなるのがほんとうらしいです。日本には政治屋は居ても政治家はいないなと思い始め、更にイジメッ子に追随し、気を使い、機嫌を損なうまいとうろうろしている様を想像し、悲しくもなっています。でも時間がたてば、また原稿書きも出来ようかと思っています（3/3）。

●萩本房枝（神奈川）：何かとあわただしい毎日を送っています。ふと、ほっとした時に外を見る

とどうしてもクモの巣の方に目が向く毎日です。皆さんにお会いできるのを楽しみにしています。

●藤井靖浩（東京）：昨年は病院で「寝たきり」となっていた母の介護、研究室の移転、その他のことが重なり、研究活動はまったく止まっておりました。9月9日に母は他界し、諸々の整理もほぼ済み、現在は気持ちを立て直すべく、1982～1987の間続いたコモリグモの生活史調査のデータ整理を再開、年内完了を目指しています。データというものは、時間のないときは整理を断念、収集優先となります。6年分も貯りますとエライことになるものだと痛感しています。.

●松田まゆみ（北海道）：昨年10月に転居した際、休眠中のフクログモ（ほとんどがヤマトフクログモ）が多数荷物と一緒に家の中に入り込んでしまいました。ところが、家の中が暖かく、休眠できなかつたためか、今年に入って、家のあちこちにクモの死体が転がることになってしまいました。それからは屋外性のクモは、すぐ外に出すことにしてますが、はたして-20℃になる屋外にいきなり放して大丈夫なものか。

夏の合宿計画 夏の宿 楠木弟 行かれたことのない方、お薦めです！

日時 7月27日（土）～29日（月）

宿泊 福島県耶麻郡北塙原村裏磐梯曾原 あやめ荘 TEL. 024-132-2805

一泊料金 大人 6000円（3食込み） 小人 割引あり

交通 ①JR利用の場合 東北新幹線「郡山」にて、磐越西線（会津若松方面）乗り換え、「猪苗代」駅下車。左手前方バス乗場3番（五色沼・磐梯高原・国民休暇村行）乗車、「小野川湖入口」下車（約30分）。徒步25分（地図参照）

費用：上野～猪苗代（新幹線特急料金含） 約7600円、猪苗代～小野川湖間 700円

②自動車利用の場合 東北自動車道「郡山IC」より、国道49号線 猪苗代湖畔

「堅田」信号右折 五色沼方面、小野川湖入口バス停先の信号「裏磐梯・剣ヶ峯」右折、150m位先の喜多方営林署事務所（向かって右側角）を右折、約1km（地図参照）

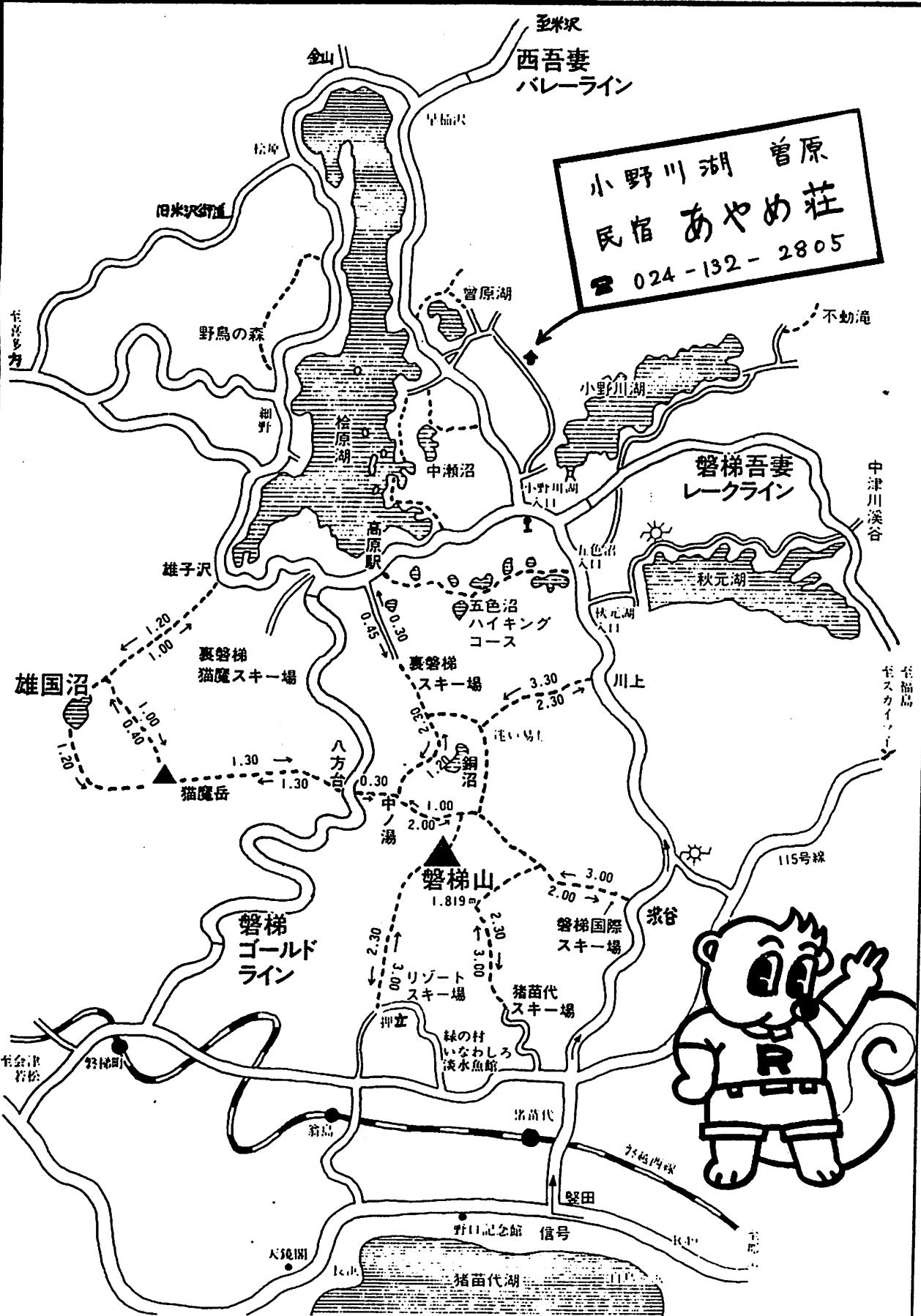
猪苗代駅発バス時刻表： 10:15, 11:05, 11:55, 12:50, 13:55, 14:35, 15:30,

16:25, 17:35, 18:50（最終）

申し込み

7月9日（火）までに手紙または電話で、新海明まで、

〒190 東京都立川市錦町3-12-16-1010 新海明 TEL. 0425-22-2605



談話会通信にて映画「アラクノフォビア」へのAmerican Arachnological Society 前会長の抗議の記事（中日新聞 1990.10.30）を見ました。古くは日本書紀・風土記に始まり、古今東西のホラー映画に登場する大蜘蛛・蜘蛛男爵へと続くアラクノフォビア（蜘蛛嫌悪症）の典型でしょう。*Delena sp.* (アシダガグモ科, Main 1976) が猛毒をもつ「兵隊グモ」として登場するという設定（岡山徹 1990）の不当さはさておき、どうせ蜘蛛を取り上げるなら、ヒトを襲う毒蜘蛛などという単純な設定でなく、多様な蜘蛛類の生態に着目したら良さそうなものです。

私は生まれつきの蜘蛛愛好家で、幼い頃から山道を歩くときは網を壊してしまわぬように注意して歩いたものです。先日はビデオで1977年米国映画「The Kingdom of The Spiders」(Kantor & Sneller製作) というのを見たのですが、5cmから15cm位の種々のオオツチグモ（生きた実物）が大量に「エキストラ」(?)として登場。残酷な人間たちによって片っ端から踏み潰されていく場面には、思わず「やめてくれ！」と叫んだものです。horror movieといいますが、動員された蜘蛛にとってこそhorribleな映画作りです。

私は不思議な蜘蛛の夢をよく見ます。その断片をもとに、アラクノフォビストへのささやかな「逆襲」として、また犠牲となったであろう蜘蛛の出演者への哀悼の意を込めて、こんなファンタジー物語を書いてみました。

(八幡明彦)

「蜘蛛の惑星」 あるいは「アラクノトピア」

I

時は199X年、品種改良から遺伝子操作にいたる人類の生物界への不当介入は「しっべがえし」に直面していた。百年以上にわたって人工的交配と人工飼料によって大自然から切り放され「飼い馴らされて」きた家畜たちは、ある日突然、人間にたいして致命的な有害成分をもつ新世代を産み始めた。遺伝子操作による毒性産出遺伝子除去のため研究がなされたが、ウシ、ブタ、ニワトリへの恐怖心が一旦広まると、もはや伝統的な食肉産業の存立は不可能となった。食肉産業は一大転換を迫られ、野鳥、野生小動物が大量に捕獲される事態となった。様々な料理法を駆使して、スズメやカエル、ネズミ、トカゲなどが食卓にのせられた。無論、多国籍企業化した食肉産業は、南側諸国の野性獣を入手し、従来のウシ、ブタ（というよりイノシシ）類の味覚をも確保する戦略をとった。北側諸国の環境保護運動は、肉食を断念できない者たちが脱落して退潮したが、逆に南側諸国では経済侵略反対の民族解放運動と結び付き、巨大なうねりをつくっていった。米ソ・EC・日本連合「多国籍軍」の戦略拠点とは、石油産出国以上に食肉産出国となつた。

一方、北側諸国における「食用」野性小動物の乱獲は、生態系に深刻な影響を見せ始めた。上位捕食者の除去による下位捕食者個体群の膨張、即ち肉食節足動物とくに真正クモ目の爆発的増大であった（Top predatorの除去による蜘蛛群集の高密度化については Schoener & Toft 1983）。

物語は、蜘蛛を主要なTop predatorとする生態系の成立に直面して、これを保護しつつ、人類の生態破壊的な文明を転換しようと努力する者たちと、Arachnophobiaに立ち、蜘蛛の絶滅をはかろうとする者たちとの間の攻防をめぐって展開する。

II

蜘蛛生態系の保護運動の最先頭に立ったのは、日本蜘蛛学会・東京蜘蛛談話会などに所

属する蜘蛛学者を中心とする「蜘蛛による害虫防除」に長年の研究・実践を重ねてきた人々である。ササグモによるスギ林の保護（萱島泉 1961）、水田の蜘蛛群集保護（小林四郎 1975）等を端緒とする研究は、90年代に入って中国蜘蛛学会（宋大祥 1987など）との協力を深め、今や蜘蛛学のみならず農学の一大分野をなすに至った。日本の各地では「農産物輸入開放政策」に抵抗し続ける農村が「蜘蛛農法」を取り入れての無農薬・無肥料生産を行なっている。化学肥料・農薬を用いた田畠に比して、圧倒的に蜘蛛・昆虫・土壤生物系の豊かなこれらの農地は、ついに無肥料生産をも可能にしたのである。これらの農村では蜘蛛の増加は喜びをもって受け入れられた。田畠を覆うコクサグモ属の「妖精のスカーフ」や電線にピッシリとついたジョロウグモの巣も村では「ありがたいもの」と受け止められる。

「夜蜘蛛は親に似ていても殺せ」という古い言い伝えはすたれ、家蜘蛛は「家の守り神」として大切にするようにと口々にささやかれるようになる。人々は、アシダカグモがゴキブリをとり、オオヒメグモが毒虫を吊り上げ（大利昌久 1975）、辺りを徘徊するハエトリグモや戸口・窓に幾重にも張られた円網が蚊やハエを取る場面に顔をほころばせる。子供たちの間には、ファミコンよりもエキサイティングなゲームとして「蜘蛛合戦」が復活する。ネコハエトリ、コガネグモなど伝統的な力士（斎藤慎一郎 1984）に加え、センショウグモ科の壮絶な闘い（Jackson & Whitehouse 1986）が人気の的となった。子供らは野山を駆け回り生き生きした目で蜘蛛を大事に育てた。何れの輸入業者によってか Portia属（Jackson & Hallas 1986）が日本に紹介されると、蜘蛛食いの蜘蛛をめぐる子供らの遊びはさらに熱狂的なものになった。いくつかの外国種は、日本に移入し野山に急速に広がる。

大人たちは、天皇制文化のもとで不當に扱われてきた「土蜘蛛」（沢史生 1990など）を復権させた。古代各地で割拠した「土蜘蛛」とは天皇王權の支配にまつろわぬ在地の軍事勢力で、多くの場合指導者は女性として『風土記』に登場している（例えば大山田女、狭山田女、海松櫻媛、八十女、速来津姫、浮穴沫媛が『肥前国風土記』に、神衣媛、阿邪爾那媛が『風土記逸文陸奥国』に登場）。「地方の時代」の掛け声のもと全国各地でこれら土蜘蛛をたたえる祭りがおこなわれるようになる。

III

一方、東京を始めとして大都市では、従来からの蜘蛛嫌いたちが米製映画「アラクノフォビア」（S・スピルバーグとF・マーシャル監督）の上映運動などを機に、周辺の農村からの蜘蛛群集の侵入を阻もうと必死である。政府は、地球環境保全のための国連条約に従って停止していた殺虫剤大量散布を検討し、また同じく条約で禁じられている不妊個体の大量放出による種絶滅措置をも検討し始める。都市生態系へ侵入し始めた蜘蛛群集は、エサ不足から、農村における群集などの成長を示すとは考えられない。しかし、それでもエアコンの通気口をふさぎ、下水道内から大量発生して路上を徘徊し、あるいは至る所に遊糸を降らし、網を張って「景観を損ねる」のだ。

決定的な事件は、新潟県柏崎・刈羽原子力発電所で起こる。蜘蛛の網が電話線に通信障害を与えることは指摘されてきたが（小野武比古 1956）、蜘蛛農法を採用する地域住民の圧倒的な反対運動によってNTT、電力会社も網の除去作業をほとんど行なえずにいた。それだけに電力会社は「蜘蛛による電力の損失」を声高に叫んできたが、ついに蜘蛛によって原発が停止する事態が生じた。原発建物内に侵入した大量の微小な蜘蛛（0.1～1mm）がコンピュータ機器内部に糸を引き回して計器をストップさせたのだ。

警察は、新潟県中頸城郡大潟町蜘蛛池を根拠とする過激派セクト「アラクノマニア」による制御室への幼蛛もちこみではないかと推測した。しかし環境中に激増する遊糸に加

え、外国より移入したとみられる極小種 (Archaeidae) の局地的繁殖も観察され、「放射能垂れ流しが生んだ突然変異種の逆襲」とさえさやかれて、真相は不明。偶然にしても、蜘蛛生態系による現代文明の制圧を予言するようなショッキングな事件であり、アラクノフォビストには戦慄を与え、蜘蛛生態系保護論者には神秘的な確信さえ与える一大転機となる。

IV

蜘蛛生態系による現代文明の制圧は、世界的に進行した。というのは、南側諸国への資源食料収奪を強化する北側諸国が、熱帯の蜘蛛の共和国へ踏み込み、ついにその「聖域」を犯し始めて、「逆襲」に会うからである。

野性動物の捕獲と熱帯林の伐採は「最後の秘境」にまで及んだ。そこには世界の蜘蛛学者さえまだ接したことのない、巨大な蜘蛛の共和国があった。クサグモ属、アシブトヒメグモ属の社会性種と *Eriophora*、*Metepeira* の円網のネットワーク (Fowler & Diehl 1978, Uetz & Cangialosi 1986) が共存して重層的に形成する巨大な網が、種々の食肉性昆虫・蜘蛛を含んで生態系として成立しているのだ。しかも、その網のさらに周縁には *Gasteracanthidae* の様々な形の鋭利なトゲをそなえた種 (例えば谷川明男 1985) が、天然の「鉄条網」をはりめぐらしている。現地住民はもちろん、獣たちが近づくことを避ける「白い聖域」である。

現地住民の制止を聞かず、ブルドーザーでその聖域に踏み込んだ商社の人間たちは、驚くべき蜘蛛の社会生活を目の当たりにする。異種にまたがる重層的な協同狩獵・捕食行動である。巣にとびかかった獵犬は、彼らの目の前で網に足を取られて、地中生活をするジョウゴグモ科の有毒大型種に噛み倒された後、共同網から出てきた大きめの蜘蛛たちによってラッピングされ、さらに多くの小型種の群がるところとなったのである。

巣の中核に危害を加えればヒトであっても捕獲してしまうであろう「蜘蛛共和国」を、現地住民は神聖視している。南側諸国は、これらの生態系を防衛することが即ち北側諸国の侵略を阻むことであると位置づけ、蜘蛛学者の協力を得て国じゅうに「蜘蛛共和国」の網を広げる計画を始める。昔から西アフリカでは、「蜘蛛がこの世界に知恵をもたらした」と伝えられている (Arkhurst 1964、中山淳子 1977)。世界に食物・水・火をもたらしたトゥレ (Evans-Pritchard 1967)、大地と万物を織機で織り出したムバ (山口昌男 1971)、天神の物語を手に入れ (Radin 1952)、さらにはハイチの大統領に抵抗するアンシ (Courlander 1960) まで、蜘蛛は知恵にたけた文化英雄だったのだ (山口昌男 1971)。その伝統が再び想起され、森林と共に存し、生態系を傷つけないように (網を壊さないように) 慎重に生きるヒト共同体の知恵が南側諸国のなかに急速に広がり、「北」に対抗する理念となっていく。

V

二十世紀。現代文明最後のあがきで石油・原発依存を続け、滅び去ったいくつかの愚かな国のおかげで、地球全体の気候は熱帯化した。現代文明が生態系への譲歩を余儀なくされた国々では、森林破壊に歯止めがかかり、森は回復しつつあった。生き残ったヒト共同体はもう国家という愚かなイガミ合いの枠組を捨てて、「蜘蛛の糸」で互いに結ばれる地球生態系の一部として、「網を壊さぬよう慎重に」暮す共生生物の一員へと、新たな進化の一歩を踏み出したのだ。「支配と階級を排した」「動物界で稀にみる平等主義社会」 (Darchen & Delage-Darchen 1986) をもつ社会性蜘蛛に倣って、ヒト社会も平等な共同体をめざし始める。かくして地球は二十世紀の危機を軽うじて回避し、「蜘蛛の惑星」として復活への道を歩み出す。

めでたし、めでたし。

参考文献：

- Arkurst 1964 "The Adventure of the Spider" (訳) アーカースト『くものぼうけん』
1968 福音館
- Courlander, Harold 1960 "The Drum and Hoe, Life and Lore of the Haitian People".
Berkeley. :174
- Darchen, R & Delage-Darchen, B. 1986, Societies of spiders compared to the
societies of insects. J. Arachnol. 14 :227-238
- Evans-Pritchard, E. E. 1967 "The Zende Trickster", London. :30
- Fowler, H. G. & Diehl, J. 1978, Biology of a Paraguayan colonial orb-weaver
Eriophora. Bull. Brit. Arachnol. Soc. 4 :241
- Jackson & Hallas 1986, Comparative biology of Portia africana, P. albimana,
P. fimbriata, P. labiata, and P. shultzii, araneophagic, web-building jumping
spiders :utilization of webs, predatory versatility, and intraspecific
interactions. New Zealand J. of Zoology 13 :423-489
- Jackson, R. R. & Whitehouse, M. E. A. 1986, The biology of New Zealand and Queensland
pirate spiders, aggressive mimicry, araneophagy and prey specialization.
J. Zool. Lond. (A) 210 :279-303
- 萱島泉 1961, 森林害虫の天敵としての蜘蛛の研究 宮崎県立高鍋農業高校
- 小林四郎 1975, The effect of Drosophila release on the spider population, Appl.
Entomol. Zool. 10 :268-274
- Main, B. Y. 1976, Huntsmen of the bush, from "Australian Spiders". Sydney :85-98
- 中山淳子 1977 『世界の民話 7』ぎょうせい :335
- 岡山徹 1990 『アラクノフォビア』光文社 :243
- 小野武比古 1956, 蜘蛛の電話妨害について, Atypus (10) :9
- 大利昌久 1975, 衛生害虫の天敵としてのクモ類の研究 3. オオヒメグモの生態 衛生
動物 26 (1) :15-19
- Radin, P. 1952 ed., African Folktales and Sculpture, Bollingen Series XXXII. :25-27
- 齊藤慎一郎 1984 『クモ合戦の文化史』大日本図書
- 沢史生 1990 『鬼の日本史 上』彩流社 :267
- Schoener, T. W. & Toft, C. A. 1983, Spider populations: extraordinarily high
densities on islands without top predators. Science 219 :1353-1355
- 宋大祥 1987 『中国農区蜘蛛』 :35-44
- 谷川明男 1985, マレーシアの真正蜘蛛類 I. 『マレーシア海外研修報告書』神奈川県
高等学校教科研究会理科部会 :44-45
- Uetz, G. W. & Cangialosi, K. R. 1986, Genetic differences in social behavior and
spacing in populations of Metepeira spinipes, a communal territorial
orbweaver. J. Arachnol. 14 :159-173
- 山口昌男 1971 『アフリカの神話的世界』岩波新書 :21ほか

出版案内 T・H・セイボリー 著『科学英語の歴史と問題点』

クモの大家Savory（サボリーとかセボリーと言っていたが、セイボリーが正しいとのこと）の著した著書を茨城工業高等専門学校教授の中島節氏が訳されたもので、年代別の科学英語の初出や解説、検討がなされている。クモを中心に論じたところはないが、なかなか興味深い。

本会には八木沼健夫氏の紹介により、総会・例会の席でもお知らせしたが、入用の方は送料込みで2000円の領布費により訳者から届けられますので、直接訳者に申し込んで下さい。

〒300 土浦市天川一丁目26-2 中島節

なお、当会にも贈呈されております。お読みになりたい方は事務局へ連絡して下さい（熊田）。

中平清 著『白帯日記』（著者自刊）

クモが網の中につける白帯について長年観察研究されている中平清氏が書かれた『白帯日記』を事務局でお預かりしております。必要な方に差し上げていただきたいとのことですので、入用の方は事務局まで連絡して下さい。採集会等での手渡し、KISHIDAIAに同封のいずれかでお渡しします（熊田）。

色の名前のタネ本 池田博明

クモの体色などを表現する時、日本語にせよ、英語にせよ、迷うことはありませんか。

色事典があつたらいいのになあと探していた矢先、次の本を見つけました。みなさんは何を使いますか。教えて下さい。

英語名の色：福田邦夫著『ヨーロッパの伝統色 色の小辞典』読売新聞社、1988年、2200円

日本名の色：尚学図書編『色の手帖』小学館、1986年、2010円

不登録クモ 「クモの映画を撮る」（吉田嗣郎氏講演、1991年2月9日6時～8時、平塚市博物館）

VTRで紹介されたフィルムの内容は、「ムツトゲイセキグモの投げ縄捕虫」「コガネヒメグモの吐き戻し給餌」「カバキコマチグモの交尾・産卵・母親食い」「ネコハエトリの対オス・対メス行動」「クモのバルーニング」、ほとんどその一部が『わくわく動物ランド』（TBS系）で放映されている。本講座の参加者は37名。

これらは世界で初めて撮影に成功したもの、あるいは撮影したことによって分かったことに満ちており、貴重な記録である。フィルムを見た後で、質問をしてもらっていたが、この質問がクモ学会でも出ないような鋭いものであった。ふだんは知っているつもりになっているクモ談話会の会員のみなさんにも、参考になると思うので、ここでは参加者の質問と吉田さんの答を記録にとどめておく。なお、私は勤務の都合で30分ほど遅れたので、ムツトゲとコガネヒメグモの件で出た質問は分からない。

(1) カバキコマチグモの生態について

①母食い中の子ども同士は共食いしないのか。「見られない」。②子が巣立つまでの栄養は母親の体だけか。「その通り」。③母が食われている時、父は?。「死んでしまった」。④産卵してから親になるまで何年かかるのか。「2年」。⑤交尾してから産卵までの期間は?。「1週間くらいと推測」。⑥脱皮のときとふ化のときでは子の脱出方法は同じか?。「足が最後に抜けるところは同じ」。⑦カバキコマチは飛ぶ?「さて、どうでしょうか?」。

(2) ネコハエトリの行動

①闘争は何のためか。繁殖期に起きるのか。「オスは徘徊して出会うと、威嚇が始まる。近くにメスがいない場合でも起る」。②なわばり意識があるのか。「」。③オス同士が出会うと必ず威嚇し合うのか。「完全にやるのは少ない」。④メスに対して旗振りは?。「しない」。⑤最初に視覚的にメスだと分かるのなら、その後の確認は不要だから、接触確認行動という名称は適切ではないのではないか。「最初の段階の確認が絶対確実ではない」。⑥メスに行動的擬態をしてしまった個体は老齢ではないか。「さて?」。⑦オスの尻の模様はメスっぽい行動を取ることと関係はないか。「模様には色々ある」。⑧メスが巣を作る葉は決っているのか。「厳密ではない。サカキ、イボタ、

ササなど」。⑩糸で巻かれたオスはどうなったか。「儀式的な糸かけのため、すぐ逃走できた」。
⑪目はどのくらいいいのか。「あまり良くない」。⑫音を感じるのか。「感じる器官がある」。⑬地取りは転移行動か。「転移行動とは言えないと思う」。⑭地取りの後の勝負期は常に短いか。「とは限らない」。⑮相手がネコハエトリでない時は、「実験していないが、闘争にならないという」

(3) バルーニング

どこへ飛ぶのか。「風まかせと思う」。

失敗、失敗、また失敗

池田博明

神奈川県立青少年センターでは、この4月の毎日曜日に「ハエトリグモの餌取り芸」と題して、2倍科学展示場で、ハエトリグモの行動をOHP投影しました。しかし、シャーレの中のネコハエトリはなかなかハエを探りません。ちっとも探らないので、個体を変えてみて、結局OHP上に3個もシャーレが並ぶ始末。こうなるとお客様としては、どのクモに注目していいか分かりませんよね。数分後にハエを探ったものの、なんとも盛り上がらないものです。シャーレが大きいのか、キイロショウジョウバエが小さすぎるのか、ネコハエトリが適切でないのか。前日餌をやったのがいけないのか。OHPが明るすぎるのか。

そこで、次の機会には5cm×4cm×3cm位の透明ケースに入れてみる。クモは絶食させたアオオビハエトリ（亜成体）。なんとハエが来ると逃げる！。それならヤハズハエトリ（幼体）ではどうか。ハエが目の前に来ても、まったく探ろうとしない。餌がアリバチでは？ もちろんダメ。

結局、直径1cm位の管びんにクモとハエを入れるのが確実のようです。5月5日のこどもの日の実験教室（クモ合戦ホンチ遊び）には、管びんを用いて餌探りが再現できました。

ネコハエトリのクモ合戦は箱の中よりも、バルサ板を2枚用いて開放空間で行うのがベストですね。箱の中ではお互いに逃げ回って、あまり戦わないことも多いのです。横浜ホンチ保存会の前川さんは天才的に扱いが上手です。私も練習のおかげで、できるようになりました。その他、クモの行動をいろいろ組み合わせて、これで大道芸をやりたい！

1990年クモ学ニュース

余興で選んでいるクモ学ニュース、自薦も歓迎します。順不同。

①日本蜘蛛学会大会で日米の合同シンポジウムが開催された。[S]

1990年度の日本蜘蛛学会第22回大会は8月25日から26日に箱根町（神奈川県）の社会教育センターで行われたが、大会2日目の午後には「クモの生態学の新たな展開」と題して初めてアメリカのクモ学者をはじめて合同のシンポジウムが行われた。講演者はS.E.Riechert, D.H.Wise, D.A.Spiller, 遠藤知二、田中幸一、宮下直の6氏であった。今後も同様の企画がもたらされることを期待したい。

②網を張る新種のイソウロウグモが発表された。[S,I]

イソウロウグモは網を張らずに他のクモの網に居候をすることが知られている。しかし、世界で初めて網を張るイソウロウグモが発見され、記載された。熊田憲一氏はニセフタオイソウロウグモと仮称していたこの種を新種として記載。和名を雄の頭部の形態からツノナガイソウロウグモとした。フタオイソウロウグモに似ているが尾の突起部はゆるく、下草の間に自分の網を張り、そこにつかむ餌を探っているという。

③マルゴミグモとトゲゴミグモのちがいが判明した。[S,I]

マルゴミとトゲゴミは腹部のトゲ（突起）の有無で區別されていた。両者は同種であるという意見と別種であるという意見に分かれていたが、谷川明男氏は両者を比較検討し、色彩やトゲの有無では区別できないが、♂ではバルブの中部把持器の突出部で、♀では貯精のうの形態から区別できることを明かにした。詳細はAtypus 96号を参照のこと。

④ホウシグモの属が変更され、新種が記載された。[I]

小野展嗣・谷川明男氏は奄美大島・西表島産のホウシグモを3種記載（アマミホウシグモ、ヒアシホウシグモ、ヤエヤマホウシグモ）。さらにホウシグモ属をBosmas and van Hove (1986) に従って、StorenaからLangbianaに移した。

⑤網を張るヤマシログモが日本にもいた。 [S]

1990年の3月に沖縄のクモの調査を行った新海栄一・小野展嗣氏はハブの存在を気にしつつも、本州産とは別種と思われるユアギグモの一一種を発見するなど相変わらずの成果をあげていたが、沖縄県二見の海岸付近の下水道トンネル内で不規則網を張っているクロヤマシログモを発見した。このクモが網を張ることについては外国では知られていたが、わが国では初めての記録である。新海氏によると網に餌をかけると隠れ家からクモが出てきて、口から粘液を射出して網上で獲物を捕らえるという。

⑥キレオビウラシマグモが韓国で記載された。 [I]

池田博明・稻葉茂代両氏が小田原でその生態を調査し、新種として記載準備中だったキレオビウラシマグモが、ひとあし先に韓国で記載されてしまった (Korean Arachnology, Jan. 1991)。学名は *Phrurolithus coreanus* PAIK, 1991 となる。図を描き終えていた池田氏は「日本全国に分布するので、韓国にもいるだろうと思っていました。残念ですが、新種記載の勉強になりました」とのこと。なお、記載文は日本新記録及び雄の記載として発表、和名はキレオビウラシマグモとする予定。

⑦神武寺での採集会でドウシグモが再び発見された。 [S]

1990年5月20日、参加者は神武寺の境内の1本の木に集まつた。かつて、この木でドウシグモが採集されたとのこと。なめるような採集が行われ、参加者のほとんどがドウシグモを見つけるほどの成果をあげることができた。しかし、発見されたのはごくばかりで、幸がどのように暮らしているかなど、新たな疑問がわいた。

⑧神奈川県でツシマトリノフングマシが採集された。 [I]

大磯郷土資料館の梶真史氏は神奈川県大磯町廬取山で、ツシマトリノフングマシを発見・採集した。記録では神奈川県で3番目となる。神奈川自然誌資料に発表予定。

⑨韓国へ日本の学者が招待された。 [S]

新海栄一・小野展嗣・池田博明の三氏は、1990年の8月下旬から9月上旬にかけて韓国を訪問し、クモの採集指導や講演を行った。これは韓国クモ研究所の招待によるものである。

⑩『スパイダー・ウォーズ』が出版された。 [S,I]

ここ数年、クモの本がたてつづけに出版されたが、今年は吉田真氏による『スパイダー・ウォーズ』が新草出版から出版された。最新のクモの生態記事（主に造網性のクモが対象）がたくさん盛り込まれている。この本の出版で生態関係者の書くネタはここしばらくは底をついた感がある。

⑪『クモの学名と和名』が出版された。 [S,I]

クモの名前の由来を懇切丁寧に解説した本が、九州大学出版会から真夏に出版された。著者は八木沼健夫・平嶋義宏・大熊千代子の三氏、日本のクモのカタログ、および蜘蛛学史展望も兼ねていて、その情報量は大変なものである。

⑫ブータンにも日本と共通の種が生息する。 [I]

谷川明男・田副幸子両氏は1990年夏にブータンでクモを観察・採集する機会があった。オダカユウレイグモ、オオヒメグモ、ミツカドオニグモ、オワレスズミグモ、スズミグモ、タニマノドヨウグモ、ジョロウグモ、オオジョロウグモ、コシロカネグモ、トガリシロカネグモ、ヤサガタアシナガグモ、キクヅキコモリグモ、アシダカグモなど日本との共通種がだいぶ見つかった。

⑬アマミキムラグモ、新種となる。 [I]

小野展嗣・西川喜朗両氏は奄美大島のキムラグモを新種として記載した。

⑭ヒメグモの雌どうしの激しい雌争いが解析された。 [I]

池田博明氏はヒメグモの雌が同居する亜成体メスをめぐって激しく争う行動を、オスを他の網に導入することで観察した。「クモの実験行動学」の一環であるという。

[S] : 新海明、[I] : 池田博明 ◆自薦・他薦を歓迎します

編集部からのお知らせ 原稿をお待ちしています。

□ 会誌編集：〒223 神奈川県横浜市港北区新吉田町1523 谷川明男

新著紹介

八木沼健夫・平嶋義宏・大熊千代子著「クモの学名と和名——その語源と解説」
A5版, ii+287 pp. 九州大学出版会, 福岡. 1990年8月.

日本のクモの学名を扱った珍しい書物が出たので、ご紹介する。本書は少し前に出た(1987年)平嶋義宏著「蝶の学名」(九州大学出版会)あるいは昨年本誌に紹介記事の出た同じ著者の「学名の話」の姉妹編である。

「蝶の学名」では、学名を通してギリシャ神話などの西欧的教養の世界における知識の一端に触れることがあり、何かと参考になることが多いので、こうした書物が出来て大変ありがたいと思ったものである。しかし、「日本のクモ」となると、評者も本誌編集を通じ、新種を扱ったクモ関係の論文にたびたびかかわりあいをもってきたが、いささか懇意をつくものであった。

内容は学名と和名の解説が全体の約半分を占め、残る半分は日本産クモ類発見命名小史、参考書、索引とからなっていて、これに日本産クモ類目録が加えられている。

学名・和名の解説部分は「蝶」の場合同様ていねいな解説がなされているが、何か煩わしい感じがないでもない。ここでは、その調べかたによって、人それぞれにいろいろな発見があるだろう。評者はかねてからその語源を知りたいと思っていたので、ジョロウグモの学名 *Nephila clavata* のところを覗いてみたが、属名・種小名とも明確に解けていないことを知って驚いた。しかし、大旨、語源説明は明解である。*Opopaea* の語源説明ではまだ難解であるとしているが、これは結局わからないということであろう。この読みはオポペアとなっていいるが、前文によると ae はアイと読むとしており、矛盾しないのだろうか。この属の和名はシャラクダニグモ属であるが、付されている漢字名のダニに相当する部分はとてもダニとは読めない。同じようにクモの字は蜘蛛であるとされているが、またこれについての考証もあるのだが(5頁)、これも評者の頭を納得させるまでに時間がかかりそうである。副題に銘打たれている「解説」部分は正確であってほしいが、若干物足りないところもあった。61頁の Sauter については昆虫学者とあるが、むしろ採集家の方がよく、「台湾に来て昆虫やクモを採集したことがある」とあるが、かれは40年近くも台湾に住んで、台湾に根をはやした人であり「採集したことがある」どころか膨大な量を「採集した人」である。

本書の中には、従来用いられてきた属名の性の誤りがみつかって訂正されたものがあり(*Scytodes*)、また新たに和名が提唱されたものもある。後者の例は174頁の *Bristowia* に対するマツモトハエトリグモ属であるが、本書の著者の一人によるこの和名のネーミングはいささか短絡的であるように思う。人名を含まない名にするか、プリストウハエトリグモ属とでもすべきものであろう。しかし、属名に人名を含めてしまうと、マツモトプリストウハエトリグモのようなものができてしまう可能性もあるので、なるべくなら避けたい。

評者には名称の解説部分よりも、ところどころに配された名称由来の読み物や後半のクモ類発見命名小史などの方がむしろ面白く参考になった。学名の話も研究史のわくの中で見ると極めて興味深くなるものである。本書の内容は一種の研究者のお遊びのように見えるが、分類学の成果をこのような仕方で一般に紹介されたものと解され、また学名に対する親しみをもたせるという意味でも本書は意義のある出版であると思われた。

(山崎柄根)

〈小野氏より〉

⑦3-14

会員移動

(入会)

鶴崎 展臣：〒680 島取県島取市湖山町南4-101 島取大学教育学部生物学部教室
佐藤 尚子：〒233 神奈川県横浜市港南区日野町6-11-16-103
加藤むつみ：〒260 千葉県千葉市弁天3-14-12
中島 晴子：〒152 東京都目黒区碑文谷4-11-10
長井 芳夫：〒275 千葉県習志野市元大久保2-4-1508
八幡 明彦：〒124 東京都葛飾区堀切5-50-12-403
東條 清：〒642 和歌山県海南市日方1156
栗根 和代：〒729-03 広島県三原市糸崎町5607
大久保光将：〒280 千葉県千葉市貝塚町1129-1
中島 祥吉：〒194 東京都町田市小川2-21-1
岡村 宏：〒215 神奈川県川崎市麻生区白山51-4-901
阿部代始子：〒280 千葉県千葉市千成台北3-13-12
鈴木 成生：〒112 東京都文京区音羽1-6-8
後藤 好正：〒221 神奈川県横浜市神奈川区羽沢町984 B-165
宮下 直：〒112 東京都文京区弥生1-1-1 東大・農・森林動物教室
朝倉 幹晴：〒113 東京都文京区根津1-22-2 三浦アパート
笠原喜久雄：〒336 埼玉県桶川市芝原1-16-15

(住所変更)

石野田辰夫：〒880-03 宮崎県宮崎郡佐土原町上田島2272
菊屋奈良義：〒870 大分県大分市東八幡町6丁目3組の1
貞元 已良：〒226 神奈川県横浜市緑区竹山1-12-11
須賀 瑛文：〒509-02 岐阜県可児市若菜台3-168
平松 総久：〒350 埼玉県川越市上戸91-3 濑尾荘202
堀越 雅弘：〒420 静岡県静岡市北沼上76-5
板倉 泰弘：〒275 千葉県習志野市大久保1-20-19 美幸荘3号
阿佐見正起：〒378 群馬県沼田市沼須町650

(改姓)

坂寄 廣（旧姓 小針 廣）

(退会)

齊藤慎一郎（希望退会）

佐藤 智子（希望退会）

事務局（会計を含む）〒221 神奈川県横浜市神奈川区片倉町199 熊田 恵一
領収証の必要な方は振替用紙通信欄にその旨お書きください。

会計局の個人所有するワープロが故障し、しばらく会計報告が出来ませんでした。お詫び申し上げます。
訂正・変更等がありましたらお早めに事務局熊田までご連絡下さい。

通信欄：〒258 神奈川県足柄上郡大井町金手199 池田博明 

* カタカムのとも 6月号は吉合昭寛さんの「ふんちゅう」です *
(IKEDA)

会計だより 郵便振替口座 東京 7-74885 東京蜘蛛談話会

会費受領
会員登録

1990年5月～ (敬称は省略させていただきます)
1991年5月上旬 (一般 2800円・学生 2000円)

1989年(平成元年)度

堀越 雅弘A044・吉谷 昭憲A045.

1990年(平成2年)度

蓮沼 克己A014・中井 恒夫A016・山川 守A017・菅波 洋平A018・鶴崎 展巨A019・早乙女 薫A020・
佐藤 尚子A021・加藤むつみA022・中島 晴子A023・長井 芳夫A024・貝発 忠治A025・八幡 明彦A026・
東條 清A028・西川 喜朗A030・菊屋奈良義A031・加藤輝代子A032・松本 誠治A033・栗根 和代A034・
林 俊夫A035・古内 栄一A036・大久保光将A037・鈴木 勝浩A039・内田 善悟A041・吉田 茂A042・
中島 祥吉A043・堀越 雅弘A044・吉谷 昭憲A045・長島 忠義A047・甲守 崇A048・福本 伸男A049・
利岡 匠A050・岡村 宏A051・阿部代始子A052・坂寄 廣A053・斉藤 博A054・萩本 房枝A079・
熊田 憲一A081・小林 健一A101・林 秀幸A111・国見 裕久A112.

1991年(平成3年)度

蓮沼 克己A014・浜村 徹三A029・菊屋奈良義A031・古内 栄一A036・大久保光将A037・内田 善悟A041・
吉田 茂A042・堀越 雅弘A044・菅波 洋平A046・長島 忠義A047・福本 伸男A049・坂寄 廣A053・
笠岡 文雄A055・徳本 洋A056・野戸 章A058・斉藤 博A054 (一部)・阿佐見正起A060・
藤井 靖浩A061・鈴木 成生A064・宮下 直A065・朝倉 幹晴A066・萱嶋 志門A067・永田 勝利A070・
布施 佳子A072・鶴崎 展巨A073・平松 純久A074・立川 晴二A076・新海 明A077・萩本 房枝A079・
後藤 好正A080・菊屋奈良義A031・熊田 憲一A081・小林 健一A101・加村 隆英A102・鈴木 勝浩A103・
佐藤 幸子A104・佐藤 尚子A104・東條 清A105・増原 啓一A106・笠原喜久雄A107・佐久間良三A108・
高橋 祐子A110・国見 裕久A112・新海 栄一A113.

1992年(平成4年)度

蓮沼 克己A014・古内 栄一A036・内田 善悟A041・緒方 清人A059・阿佐見正起A060・田中 穂積A075・
立川 晴二A076 (一部)・萩本 房枝A079・鈴木 成生A109.

1993年(平成5年)度

古内 栄一A057・萩本 房枝A079.

1994年(平成6年)度

萩本 房枝A079.

寄付

平松 純久氏
鈴木 成生氏

○1991年度の会費の納入をお願いします。
○会費の問い合わせには受付番号(A000)を明記
してください。

バックナンバー代領収

柳沢 新・平松 純久・永田 勝利..

会費の納入状況につきましては、5月上旬に発送しました観察採集会の葉書の、宛名氏名に記入してある年号を御覧下さい。記入してある年号まで会費を納入しております。会費は前納制ですので1991年までまだの方はお早めに納入をお願いします。